



会報

だいせん 大山恵みの里

daisen-megumi-no-sato



第4号



消費者に笑顔で対応する生産者会員

マルイ両三柳店で 大山町フェア(第二弾)

マルイ両三柳店の改装1周年記念イベントが7月26日(土)に開催され、公社のスタッフと生産者会員が自慢の野菜を店頭販売しました。今回の取り組みは7月5日(土)に続き、2回目の取り組みです。

イベント当日は、気温38度の記録的な猛暑日となりました。あまりの暑さで、お客さんの来店もまばらな中、大山町産農産物は大変良く売れました。よそから仕入れた野菜より、大山町産の値段が少々高くても、鮮度がよく、良い品質のものであれば確実に売れることを実感できました。特に、試食販売を行ったミニトマトと辛味大根は、群を抜く売れ行きでした。

生産者がお客様と対面することで、安心・安全をPRすることができましたし、試食でおいしさを実感してもらったこともできました。また、店舗責任者からも高い評価をいただきました。生産者にとって、今後の活動に大いに参考になる取り組みでした。

【会員の横顔】

№3

谷 清美さん(大塚)

約30年前に30代で脱サラし就農しました。当時の基幹作物は採種でしたが、勤めで貰う給料より農業所得が多かったことがきっかけです。その頃は、今のように有利な担い手育成の事業もなく、経営を支援するような助成措置はあまりありませんでした。

勤めをしながら農業に従事していた時期もありましたが、どちらも中途半端になってしまったので、専業農家になりました。採種には10年ほど取り組みましたが、雑種交配の恐れが生じたので、現在のような米と大豆を基幹作物とし



た経営に切り替えました。労働力が限られていたため、機械化ができ規模拡大できる経営形態を選択しました。バブル全盛期でもあり容易に規模拡大することができました。現在の経営面積は、水稲15畝(内有機無農薬栽培1畝、減農薬栽培4畝)、大豆5畝の合計20畝です。

有機農業を目指した理由は乳幼児のアトピー性皮膚炎が多発するようになり、その原因が食物に含まれる農薬ではないかといった話があり、当時の光徳保育所の調理師が離乳食の給食に採用したい意向を受け、取り組みを始めました。また、名和町に派遣されていた県職員のアドバイザーや支援

等もあり、有機米の受け入れが町内の4園に拡大していきましました。

大山恵みの里公社が設立されたころは、有機米を東京や大阪の限られた消費者に宅配していました。

現在は、道の駅の食堂(大山きやらぼく)にも採用され1ヶ月に3袋程度を毎月出荷しています。同様の取り組みをしている生産者とのグループ活動により、量と品質を確保できるようにになりました。

大豆にもこだわり、地大豆(品種:大山2001と緑だんだん)の生産に力を注いでいます。「だいせん2001」は、鳥取県氷温協会との連携により納豆としての商品化を目指しています。「緑だんだん」は町内の作業所が緑豆腐として商品化しています。

42歳になる長男が後継者になりましたので、これからは原料生産だけではなく、付加価値の高いおいしい商品づくりに取り組んでいきます。

公社に対しては…

大山町産に対する「こだわり」が必要だと感じます。生産者会員との意思疎通も不十分だと思います。また、消費者との信頼関係を築くためには、スピーディーな動き

が必要です。生産者が誇りや張り合いを持って頑張れるよう力を貸してほしいと思います。

以上、辛口のご意見やアドバイスをいただきました。

◇ ◇ ◇

■流通部門から…

7月から試験的取り組みできました岡山マルナカへの週2便体制は、8月末で一旦終了します。

当面は、出荷量の見込みを考慮して、臨機応変に対応することになります。ご了承ください。

◆ ◆ ◆

米子マルイ青果部門への直接買取りスタートし、とうもろこしを各店へ納品しました。他産地と比較して大変品質が良く、お客様からは好評でした。今回の取り組みに対し、生産者会員からも、手間が省けるし、売れ残りの心配もいらないので、品目や数量を増やしてほしいとの声が聴かれました。

◆ ◆ ◆

大山町産玉ねぎを多数必要としています。卸し先に可能な限り納品をしていきたいと思えます。ご協力をお願いします。

【連絡先】公社本部 高根

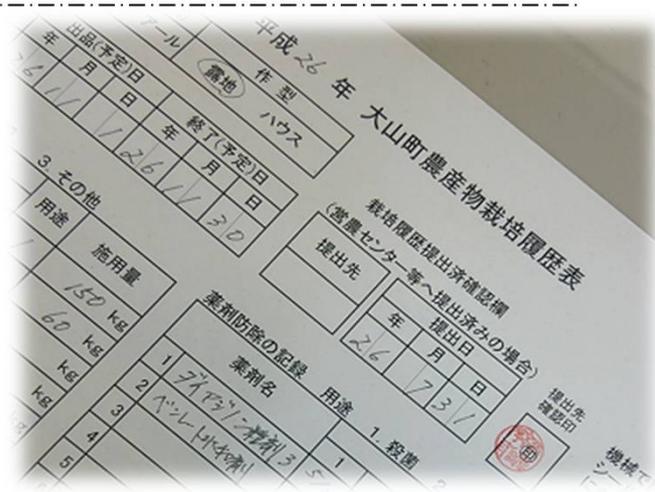
☎0859-54-6600

栽培履歴はなぜ、 必要なの？

大山恵みの里公社では、出荷される農産物は必ず栽培履歴を提出していただいています。栽培履歴は、出荷開始の3日以上前に提出していただくことになっていきます。本部事務局では、毎日、皆さんが出荷された作物の栽培履歴が提出されているかどうかのチェックを行っています。未提出の方に提出のお願いをすると、「書くのが面倒だから」「ちよつとしか出さないから」「何にも農薬使っていないから」と、よく言われます。

では、『栽培履歴』はなぜ、必要なのでしょうか？

栽培履歴もトレーサビリティ（食品の安全を確保するために、栽培や飼育から加工・製造・流通などの過程を明確にすること。また、その仕組み。）も、その導入の理由は“消費者（お客様）の意向”ということなのです。行政がその導入を推進する理由も、2000年来の食品事件や事故の結果、様々なアンケートによって、使用された農薬や化学肥料、食品添加物の表示を消費者が求めている、つまり安全・安心を求める国民全体の要求があるから



なのです。

しかし、消費者が求めているのは、“食べ物が安全なものであること”ただそれだけで、紙切れを要求しているわけではありません。

では、誰にとって栽培履歴が必要なのか？それは作る人、流通させる人、売る人にとってです。作る人にとって栽培履歴とは、自ら決めた（決められた）基準通り生産しているかを確認する有効な手段であり道具です。見方を変えれば、作り方を向上させていくための優れたデータとして利用することもできますし、自分の商品の優位性を消費者に説明する

る有効なメッセージにもなります。

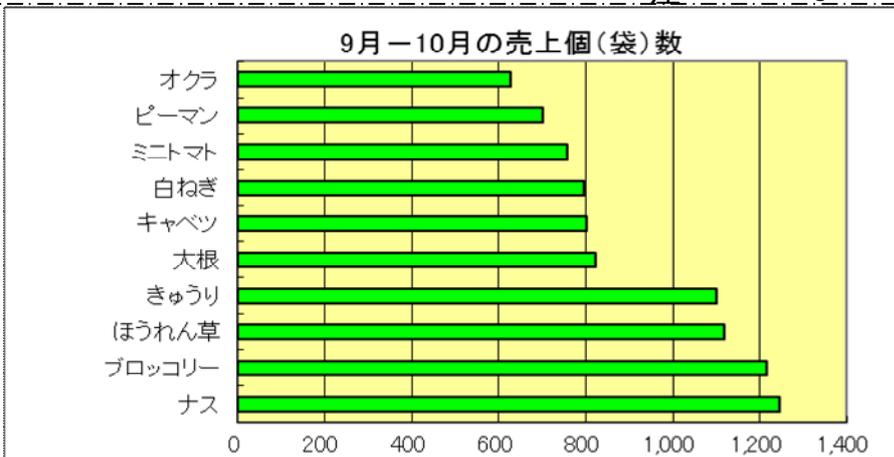
私たちの日常生活が100%安全だとか、一切ミスが起こらないということは残念ながらあり得ません。トレーサビリティとは、それに備える不可欠な道具です。ミスが起こってもすばやく情報公開し、対応できるということは消費者と生産者の信頼に繋がるのです。生産者の皆さんも、自分を守るための道具として『栽培履歴』をきちんと管理し、出荷前提出を厳守してください。よろしくお願いたします。



■売れ筋野菜ランキング

9・10月（2ヶ月分）の道の駅とみくりや市の売れ筋商品（単位は数量）のトップテンです。7・8月と同じように、この時期も、夏野菜が主力商品です。ブロッコリーもよく売れて

いますが、ほとんどが10月の実績です。夏場にはランク外のほうれん草が売り上げを伸ばしています。



編集後記

例年になく、盆前に台風が西日本に上陸した。それ以降、不純な天気が続いている。自然現象は如何ともし難いが、農産物の収穫、植え付け等に気を揉むところである。(カ)